

2022年2月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500hPa 高度をみると、中央～東シベリアでの明瞭な正偏差を伴って対流圏の極渦が分裂し、その一部は日本の北東海上に南下した。さらに、カナダ北部～スカンディナビア半島付近で500hPa 高度の負偏差、北大西洋中緯度帯で正偏差が明瞭だったほか、ヨーロッパ～ユーラシア大陸南部～北米で波列パターンが明瞭で、アラスカの南で顕著な正偏差が見られた。200hPa 風速をみると、北アフリカ～ユーラシア大陸上で亜熱帯ジェット気流の蛇行が明瞭だった。北米～ヨーロッパでは偏西風が平年と比べて北偏した。海面気圧をみると、シベリア高気圧が平年より強く、アリューシャン低気圧が平年の位置より南西に寄って強かった。また、アイスランド付近～スカンディナビア半島付近で海面気圧の負偏差、北大西洋中緯度帯で正偏差が見られた。850hPa 気温をみると、シベリアの広い範囲で高温偏差、北米北部、東アジアで低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、北インド洋熱帯域の東部～フィリピン付近、スマトラ島の南西、メラネシアで活発、太平洋赤道域の日付変更線付近～東部で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、インド洋東部～インドネシア付近に位置していたとみられるが、東進は不明瞭だった。対流圏上層では、太平洋熱帯域の中部で南北半球対の低気圧性循環偏差となった。さらに、ユーラシア大陸南部で亜熱帯ジェット気流に沿った波列パターンが卓越し、日本の南西では対流圏上層で高気圧性循環偏差となった。対流圏下層では、インド洋熱帯域で南北半球対の低気圧

性循環偏差、太平洋熱帯域で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。海面気圧は、赤道域では、太平洋の中部～東部で正偏差、インド洋～太平洋西部、大西洋で負偏差となったほか、南インド洋熱帯域で負偏差が明瞭だった。南方振動指数は+0.8だった。

世界の天候

世界の月平均気温偏差は+0.19℃(速報値)で、1891年の統計開始以降、2月として5番目に高い値となった。2月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.80℃/100年(速報値)である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

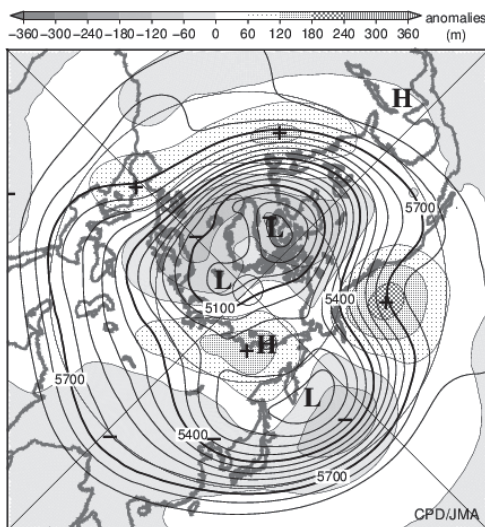
- パラグアイ南東部及びその周辺で異常高温、中国南東部、中国南西部及びその周辺、インドネシア東部、米国南部及びその周辺で異常低温となった。
- 中国南東部～マレー半島、ロシア南西部、ヨーロッパ東部～中部、カナダ南東部～アラスカ南部で異常多雨、西日本～中国東部、中央アジア南部、米国北西部で異常少雨となった。

(気象庁 大気海洋部 気候情報課)

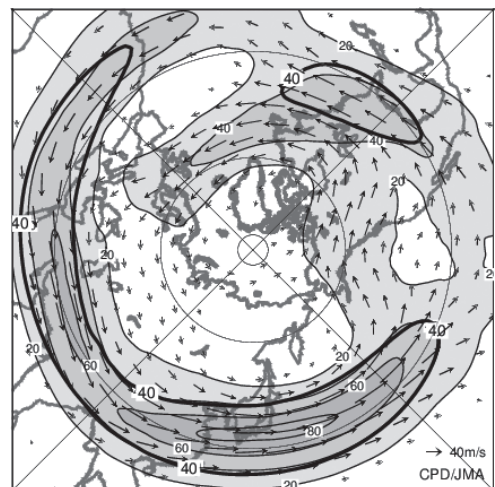
※ 特に断りのない限り、1991～2020年平均値を気候平均値として記述しています。

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

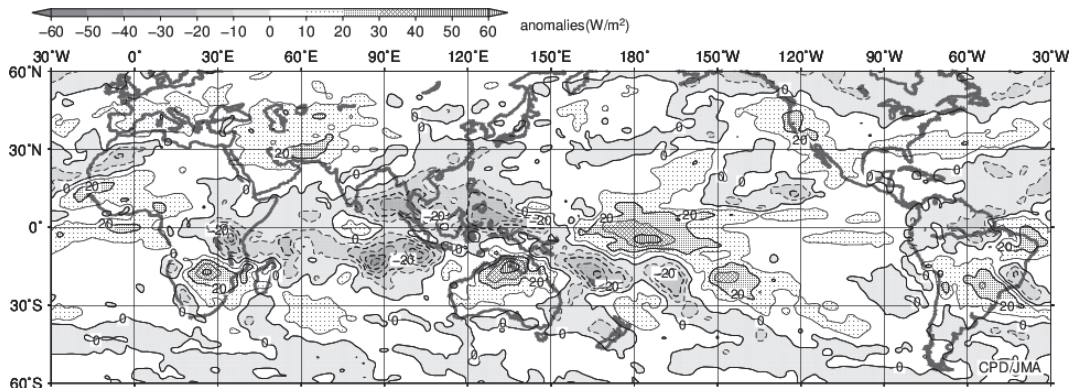
<https://www.data.jma.go.jp/cpd/diag/sokuho/index.html>



2022年2月の北半球月平均500hPa 高度及び
 平年偏差
 等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は
 1991～2020年の平均値。

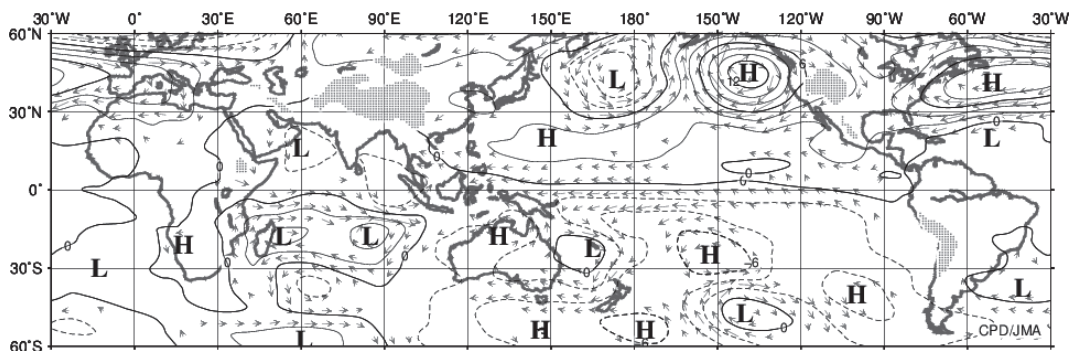


2022年2月の北半球月平均200hPa 風速及び
 風ベクトル
 等値線間隔は20m/s。太実線は平年の風速で等値
 線間隔は40m/s。平年値は1991～2020年の平均値。



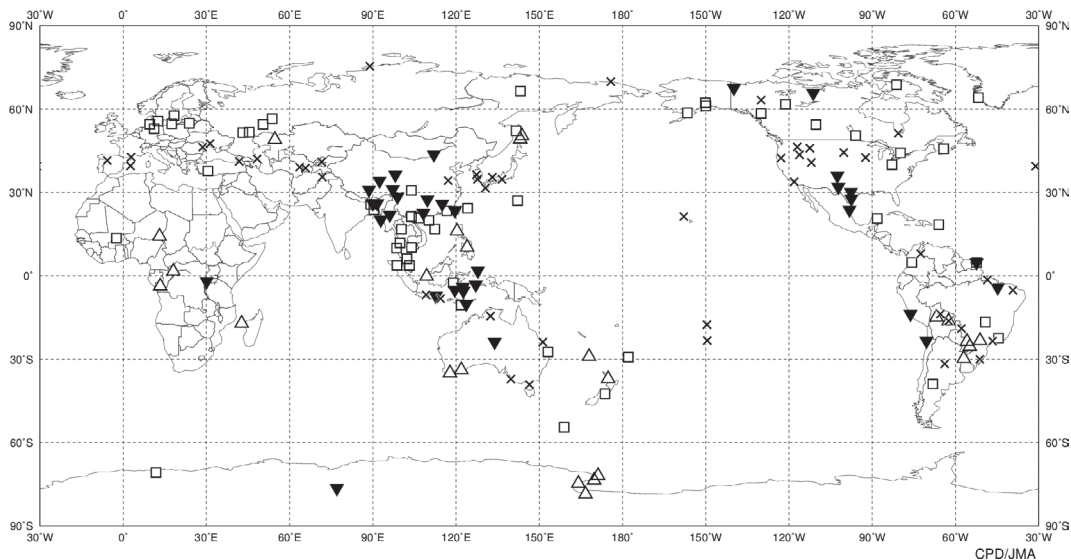
2022年2月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁（NOAA）より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1991～2020年の平均値。



2022年2月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1991～2020年の平均値。



2022年2月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。